

藤並の森

vol.

111

2025.12

リレー随筆

「怖い」を愉しむ

加門 七海

「ここが首切れ馬の通った道です」

夕暮れどき、人家も疎らな寂しい道を指差され、私は思わず歓声を上げた。

首切れ馬の伝承は全国各地に存在している。私が道を示されたのは徳島県某所だが、四国には四県すべてに伝承地があるという。四県を跨いで駆け巡る首無し馬はありやなしや。四国に行つて確かめたい。

しかし、考えてみると「四国に行く」という言い方は、あまりに大雑把で失礼だ。本州に行くとは言わない

し、関東地区でも一都六県、東京都に限つても銀座と高尾山では話が違

う。だが、土地勘のない人間はそれぞれの地域性はもちろん、各地に点状する観光名所を認識するのがせいぜいだ。私も反省しなければならぬ。四国四県、明確に区別がついているかというところ、かなりアヤシイ。

四国は三度訪れている。

高知県に行ったのは、今から二十年以上前。香南市赤岡町で開催される「絵金まつり」のためだった。

ご存じのとおり、土佐の絵師・金藏は「血みどろ」のキャッチフレーズを冠する芝居絵を多数残した人物だ。その絵金の描いた屏風絵が「絵金まつり」の期間中、神社や商店の軒下に出る。

日暮れてのち、血飛沫の跳ぶ凄惨な絵が、提灯や蠟燭の灯に揺らめく様は、曰く言い難い趣きがある……。そう聞き及び、私は勇んで出かけた。

ご承知のとおり、私の好物は怪談

だ。ゆえに「絵金まつり」でも、さぞや、美しくもおどろおどろしい景色が見られるだろうと期待したのだ。

しかし、予想は裏切られた。絵金は確かに素晴らしかった。だが、「絵金まつり」は祭りの名どおり、賑やかで陽気なものだったのだ。

遠くからカラオケ大会の歌声が響いてきたときは、堪えきれずに笑ってしまった。

いや、元々が大衆娯楽である芝居絵だ。高揚した場を飾ることこそ、本来の姿なのだろう。

怖いという感情もまた、一種の興奮を隠している。喜怒哀楽同様に、人の佇まいの中にある。そして怪談はいつだって、愉しみと表裏一体だ。

だから百物語は時代を越えて開催され続け、お化け屋敷は常に賑わい、怪

異は記録され続ける。

我々がそれらに向ける眼差しには、好奇心や恐ろしさを超えた愛情や愉楽が宿っている。

「怖い文学展」高知県立文学館×香美市立美術館「会場の中に立つたなら、展示と共に周囲の様子をそつと窺つてみてほしい。

首切れ馬の話聞いた私が歓喜したのと同様、皆、慄きながらも目を輝かせて「怖い」を堪能しているはずだ。

(作家)



写真撮影／富永智子

次回
開催

怖い文学展

高知県立文学館×香美市立美術館

令和8年1月17日(土)〜3月22日(日)

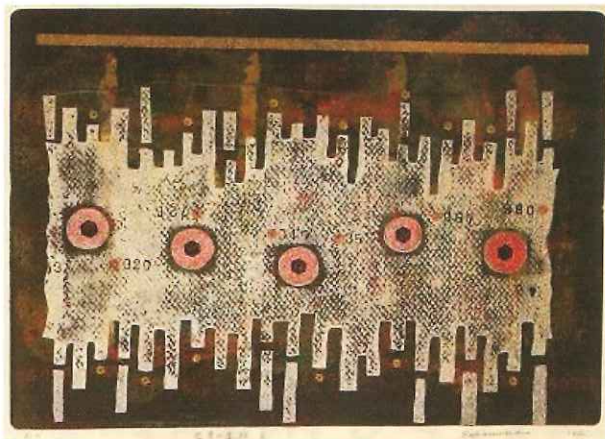
異界、妖怪、陰陽師、怪談など、今年も各地で様々な怖い催しが開催され、好評を博しました。人々はなぜ「怖い」を求めるのでしょうか？

高知県立文学館では、高知県香美市立美術館で同時期に開催する「怖い話と怖い絵」展とコラボレーションをしつつ、独自の切り口で「怖い」に迫る展覧会を開催します。

「怖い」をさぐる

人が怖い、モノが怖い、状況が怖い…世の中には様々な「怖さ」があります。

ここでは、高知県香美市立美術館の所蔵作品を中心に、文学作品に描かれた「怖い」シーンを紹介。あわせて、人形作家・あだち杏氏と生徒の皆さんのご協力のもと当館所蔵の



坂上貞宣「思考の遺跡II」／香美市立美術館蔵

『土佐化物絵本』や妖怪・妖精をテーマにした創作人形を展示します。あなたは何に「怖さ」を感じるのでしょうか？恐怖との出会いをお楽しみください。

「怖い」をつくる

幽霊・生霊・妖怪・神仏を材に様々な物語を紡ぐ作家たち。

言葉で読者に「怖い」を感じさせる陰には、作家それぞれが抱いている怪異に対する愛情と敬意、そして創作への情熱がありました。

このコーナーでは、作家・加門七海氏にご協力いただき、作家が読者を恐怖の世界に誘う源泉を覗いていきます。会期中には加門七海氏による記念講演会も開催しますので、ぜひお越しください。

「怖い」のゆくえ

江戸時代以降、日本では怪談ブーム・心霊研究ブームが繰り返し興りますが、令和は空前の「実話怪談ブーム」と言われています。

起承転結や因果因縁の原因を追究せず「聞いたこと・あったこと」を重すぎない語りで表現する手法は、タイパ・コスパを重視する現代の若者にマッチし、多くの「怪談師」や新感覚の心霊イベントが生まれ続けています。

その「実話怪談系」の先達ともいえるのが高知県出身の田中貢太郎です。和漢の怪談をこよなく愛した彼

は、日常にふと訪れる小さな怪異も掬い取り、読者に紹介していきました。



田中貢太郎著 『怪奇物語続編』(右)と『怪談雨夜草紙』(左)

このコーナーでは田中貢太郎から坂東眞砂子まで、怖いものを愛した高知ゆかりの文学者を紹介。怪談の歴史なども紹介し、私たちの「怖い」の見たさの深層に迫ります。

はたして、令和8年はどのような形の「怖い」が発生するのか、怪異との付き合い方に長けている文学者の目線を通して皆さんと考えていければ幸いです。

(学芸課／福富陽子)

好評
開催中
【レポート】

「短詩型文学 その魅力」

令和7年10月4日(土) ≪ 令和8年1月4日(日) ≫

秋の企画展「短詩型文学 その魅力」、現在好評開催中です。

短詩型は、俳句や短歌、広い意味では短い詩を含むこともありすが、この企画展ではおもに俳句と短歌を扱いました。土佐・高知の文学は、歌論としての側面を持つ、紀貫之の『土佐日記』にはじまり、近世になると文人たちが万葉調の和歌を詠む一方、庶民の間では狂句が流行し、「土佐テニハ」という独特の詩形も生まれました。近代

に入ると俳人では浜田波静、若尾瀾水が、歌人として北見志保子や橋田東声らが登場する一方で、独特の俳句を残した田中貢太郎もあり、主流の中で活躍する人、メインストリームから外れて独自の道を歩む人まで、バラエティ豊かなのも土佐の短詩型の特徴と言えるでしょう。

展示では当館の収蔵品を中心に、正岡子規が若尾瀾水にあてたはがきなど、貴重な資料も数多く

展示。また、より親しみを持っていただくための土佐和紙を使った「ことのは」展示やジオラマを使って土佐の句碑・歌碑等を紹介するコーナーなどを設けています。

し上げております。ぜひお越しただき、好きな句や歌を見つけてほしいと思います。

(学芸課／川島禎子)



展示室ようす



オリジナル短詩型キーホルダー

展示。また、より親しみを持っていただくための土佐和紙を使った「ことのは」展示やジオラマを使って土佐の句碑・歌碑等を紹介するコーナーなどを設けています。



中村達志さんの俳画イベントの様子

（学芸課／岡本美和）

お城下文化の日レポート

（学芸課／岡本美和）

『土佐日記』停泊の地(1)

はるか遠くの京を目指し、旅をする紀貫之一行。今回は南国市にあるゆかりの碑を紹介します。

土佐を船で移動の際、浦戸で1泊した後「大湊」という場所に到着します。土佐日記には「承平4年」二十八日。浦戸より漕ぎ出でて、大湊を追ふ」と書かれています。

大湊という地名は現在残っており、南国市前浜や十市など場所は諸説ありますが、特定はされていません。有力な説は前浜で、大湊公園には「大湊泊地跡」碑があり、側面には「紀貫之が土佐日記に記す」と刻まれています。隣には松の木があり、標柱によると土佐日記に大湊が記されたことを偲び植樹されたようです。遊具はなく小さな公園ですが、平安時代がイメージされたのか柵の桜のレリーフが華やかで、後川が流れ良い景色です。



「大湊泊地跡」碑



大湊公園

した。公園から500メートルほど南に行くと、貫之たちがこれから進んでゆく太平洋が広がります。

ここで『土佐日記』の内容を見ると、天気などが影響し貫之たちは元日をまたぎ10日間大湊に滞在したようです。この間、人々がまたしても酒などを持って来たこともあり、にぎやかな宴も張られたと思いますが、日記からは長期間留め置かれた停滞感が漂います。元日を迎えた貫之は、祝いの日に食す縁起物もない地であり、また求めることもしなかったと少し皮肉な描き方をしています。土佐の名産品であったためか、押鮎(塩押しした鮎で祝いの物に用いる)はあり、土佐の人々はその口をかじります。口づけられた鮎に「京の民家でしめ縄に飾られる鮎の頭や終はどうしているか」と冗談交じりに語らせ、懐かしい京に思いを馳せているようです。

この元日の条からにじむ望京の思いは、続く大湊停泊の日々のある出来事につながるようになります。次回はその出来事に関連する碑を紹介していきます。

(学芸課/笠岡花菜子)

資料受贈報告

寄贈資料から

『橋田憲明句集』

橋田憲明著 文学の森刊

令和7年3月 396頁

著者献呈本

明憲集
橋田句

右は、昭和30年に刊行された処女句集『足摺岬』以来、実に70年ぶりに刊行された橋田憲明氏の句集です。

著者は昭和8年に高知市春野町に生まれ、16歳で川田十雨門下となり、以来、ホトトギス派の俳人として長い間活動されています。17歳の時に「南学の発祥地とや遍路行く」の句が「ホトトギス」の虚子選となるなど、若い頃から頭角を現していました。のち「勾玉」主宰、「高知新聞」朝日新聞「高知版の俳句選者」、また高知県俳句連盟の会長になるなど、長い間県内の俳句振興に寄与しました。平成23年には高知県文化賞を受賞されています。現在は俳誌「勾玉」の顧問として、なお衰えぬ創作への情熱をお持ちです。

76年に渡る俳句人生を送っている著者が一貫して持っていることは「みることをだいにしする」ということです。印象的だった句をいくつか挙げてみましょう。

波の穂のおぼろおぼろをたたみ航く
鶴鶴の光となりて徒渡る
紙を漉く音を正しく繰り返す

受贈報告

(令和7年8月・10月)敬称略

坪野亜朱・川島豊敏関係資料 草稿 詩誌等

嶋岡 豊・みらいらん 16号 池田 康編

有川ひる・「The Passengers on the Hankyu Line」(阪急電車)英語版

有川ひる著 Allison Markin Powell訳 Doubleday刊

中脇初枝・伝言 文庫版 中脇初枝著 講談社刊

柴田ケイコ・パンどろぼうとスイーツおうじ 柴田ケイコ作 KADOKAWA刊

常光 徹・えほん 学校の怪談トイレの花子さん・かくれんぼ 文・常光 徹 絵・

橋喜八 講談社刊

神浦高志・小泉八雲の妖怪図鑑

神浦高志編 三才ブックス刊

山形敬介・詩文誌 GUILTY 51号

ギルティ編集局編

佐竹峰雄・歌文集 山脈通か

窮理舎・窮理 28号 伊崎修通編

窮理舎刊

オフィスカ・いもつと知りたい夏目漱石

文学と美術 古田 亮 出口智之著 東京

美術刊

レマン・トラングエル 450号

三浦博信編 東日本旅客鉄道刊

このほか、全国の個人・関係機関の皆様から図録など数多くの資料をご寄贈いただきました。厚く御礼申し上げます。

平明でありながら余韻があり、しかも言葉一つ一つが動かしようのないものです。徹底した観察がその背後にあるのでしょうか。著者は、当館の初代館長です。私が高知に来た時はすでに職を引かれていましたが、俳句について何か質問をすると、にこにこしながら丁寧にご教示下さいました。それでいて文章は隙も無駄もなく、普段のお姿とのギャップに驚かされました。俳句に厳しく誠実に向き合い研鑽を積んでこられたことがうかがえ、自分の文章が恥ずかしくなったことを今でも思い出します。

(学芸課/川島慎子)

第28回 児童生徒文学作品 朗読コンクール 県審査・ 記念講演会



記念講演会の様子

11月2日(日)に、第28回児童生徒文学作品朗読コンクールの、県審査および記念講演会が当館で行われ、今年には小学生13名、中学生8名の計21名の児童生徒の皆さんが県審査に臨まれました。

地区審査は西部、東部、中部の3地

区で夏まつきかりの8月中旬から始まり、貴重な夏休みの間にも練習に打ち込んだ皆さんが、緊張しながらも堂々と発表に臨まれる姿は、エネルギーにあふれ眩しく感じられました。県審査でも努力の成果を遺憾なく発揮され、審査を終えた皆さんの顔は晴れ晴れとした達成感で満ちていたように思います。

また今年は、絵本作家の宮西達也氏を特別審査委員として迎え、記念講演会では「優しさと思いやりと、夢」というテーマでご講演頂きました。

最初に全国各地で行われた講演会の様子をパワーポイントで紹介していただき、中国・武漢で行われた2500人規模の講演会の様子には、会場からどよめきが起きました。その後、学校の指導者が指名され、先生の作品の登場人物になりきってセリフを朗読する即興の読み聞かせが行われ、先生のリズムカルなリードもあり、笑いが絶えない楽しい時間となりました。『おまえうまそうだな』などの作品も自ら朗読してくださり、子どもたちは文字通り身を乗り出して聞き入っていました。

「絵を描く仕事をしたい、という夢があったから、一生懸命頑張れた。周りに助けしてくれる人がきつといる。一生懸命やっていたら、必ず夢はかなう」という言葉で講演会は締めく

くられ、朗読に一生懸命取り組んでいる児童生徒たちに大きなエールとなりました。

朗読は文字を間違えなく読むことも大事ですが、間のとり方や緩急などでいかに自分の気持ちを聞いている人に届けるか、聞いている側が居てこそ成立する、演劇にも似た不思議な魅力があることを、今回のコンクールを通して感じる事が出来ました。

ご参加いただきました皆様には、朗読した作品と共に思い出となることを願ってやみません。本当にお疲れさまでした！ぜひ来年のご参加もお待ちしております。



審査結果は以下のとおりです。(敬称略)

金賞	土佐女子中学校 2年 竹崎 つむぎ		
	宮西達也賞 高知県立国際中学校 3年 牛若 深月	高知県教育長賞 高知市立一ツ橋小学校 6年 田村 奏歩	館長賞 田野町立田野小学校 2年 前田 梓沙
特別賞	四万十町立田野々小学校 6年 佐藤 さち	高知大学教育学部附属中学校 3年 門田 麻沙	
銀賞	高知大学教育学部附属小学校 5年 坂本 柚華		
郷土文学賞			

銅賞	高知大学教育学部附属小学校 5年 カヌー 照良
	香南市立野市東小学校 6年 桑名 希保
	黒潮町立南郷小学校 5年 大西 将仁
	土佐塾中学校 3年 大石 葵
	高知市立旭中学校 1年 岡林 もも

最後になりましたが、児童生徒さんはもちろんのこと、保護者の皆様、ご指導頂いた学校関係者の皆様、関係各所の皆様のご協力をもって、今年も無事開催出来ましたことを感謝申し上げます。

(学芸課長/織田敦子)
(学芸課/岩根令以子)

※上記のほか、9名の方が入賞されました。



短い秋が終わりを告げ、冷たい風が吹く季節となりました。あっという間に本年も残り少なくなり、師走の慌ただしい雰囲気をもたらすところを感じます。

ただ今開催中の「短詩型文学 その魅力」展では、SNSでの短歌ブームもあり、二十代・三十代のお客様にも多く来館いただいています。熱心に展示をご覧になり、自作の句を書いていって下さるお客様もいらつしやいます。

そんな中、ミュージアムショッポではお勧め商品として、俳句帳を販売しています。

優しい手触りの和紙が50枚綴りとなっていて、1ページに一首書けます。ケース付きで持ち運びも出来るので、普段は掛け軸のようにお部屋に飾っておいて、お出掛けの際に持って行くのはいかがでしょう。

ぜひ文学館でお手に取ってご覧ください。

(総務事業課／大原良子)



館長エッセイ

災害列島の朝にどんぐりを

澤田 博睦

今年、春には各地で大規模な林野火災が相次ぎ、夏には早々と梅雨が明け、熱中症警戒アラートが毎日のように出されました。また、全国で豪雨災害や竜巻、雷の被害が報告されるなど、災害が多発しました。

私も、先日九州北部のとある鄙びた温泉宿に泊まった時、緑に囲まれた露天風呂や、彩も鮮やかな夕食を堪能したあと、さぞかし星空も綺麗だろうと外に出ると、急に稲光がして雷鳴とともに土砂降りに。残念ながら宇宙見物は、またの機会にお預けとなりました。

8月には内閣府から、300年眠る富士山の噴火のCG動画が公表されましたし、南海トラフ地震についても、発生確率が今後30年以内に80%程度とされていたものが、60%→90%に改定されました。過去の噴火や地震について研究が進み、技術も進化してきたためですが、いつ発生してもおかしくない状況ではあるようです。改めて、日本は至る所に災害リスクが潜んでいる災害列島であることを痛感しました。

そういえば、昭和南海地震が発生したのは12月下旬。防災グッズも冬バージョンにしておかないと。

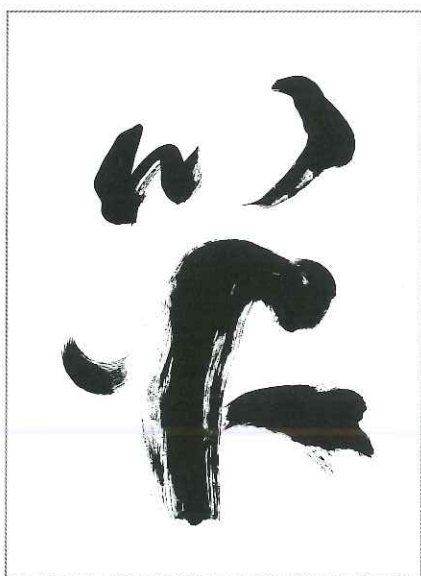
「天災は忘れられたる頃来る」の言葉で知られる寺田寅彦博士は、関東大震災の際、震災調査に従事。これを契機に火災・津波・地すべりなど防災に

関する研究を始めています。火災旋風のしくみや森林火災と気象との関係、砂層の崩壊などに関する研究・執筆を通じて、防災面から警鐘を鳴らし続けました。

先日、寺田寅彦記念館友の会の宮会長をはじめ関係の皆様が、NHK朝の連続テレビ小説のモデルに「らんまん」の牧野富太郎博士、「あんぱん」のやなせたかしさんの次は、「どんぐり」で寺田寅彦博士を採り上げてもらおうと、署名を添えてテレビ局に要望したとのこと。災害が頻発する今だからこそ、広く知って欲しい、その思いを伝えたい。皆様が地道に活動が続けておられることに敬意を表します。

3年後の令和10年は寺田寅彦博士生誕150年の記念の年。当館も、皆様のお力添えをいただきながら様々な準備を進めたいと考えています。

寺田寅彦博士の「好きなもの いちご、コーヒ、花、美人、懷手して宇宙見物」の歌には、博士ならではの贅沢な時間を感じます。珠玉の短歌や俳句を集めた企画展『短詩型文学 その魅力』は年明け1月4日(日)まで。



「災」



短詩型文学その魅力

- 会 期 令和7年10月4日(土) ≫ 令和8年1月4日(日)
- 開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
- 休館日 年末年始(12月27日～1月1日)
- 場 所 2階 企画展示室
- 観覧料 600円(常設展含む) 長寿手帳等
お持ちの方・高校生以下は無料

▶ 講演会 俳句、肯定の詩

俳句甲子園出身の神野紗希さんが、俳句のみずみずしい魅力をひもときます。句作のアドバイスも。

- 講 師 神野紗希氏(俳人)
- 日 時 令和8年1月4日(日)
午後2時～3時30分
- 場 所 高知県立文学館1階ホール
- 参加費 要当日観覧券
- 申 込 電話または当館受付
(定員先着100名)

※句の添削を希望する方(先着30名まで)は、申込時にその旨をお申し出ください。題は「夢」あるいは自由。俳号・匿名可。

▶ オリジナル短歌型 キーホルダーをつくろう

好きな短歌・俳句を見つけて、キーホルダーにしよう。

- 日 時 令和7年12月21日(日)
午後2時～4時
- 場 所 高知県立文学館
1階ホール
- 参加費 要当日観覧券
- 申 込 不要(直接会場へ)



展示会の紹介をしています！詳しくは3ページ目をご覧ください。



怖い文学展

～高知県立文学館×香美市立美術館～

- 会 期 令和8年1月17日(土) ≫ 3月22日(日)
- 開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
- 休館日 会期中無休
- 場 所 2階 企画展示室
- 観覧料 600円(常設展含む) 長寿手帳等
お持ちの方・高校生以下は無料

相互割引！

香美市立美術館の「怖い話と怖い絵展」コラボ記念！

下記の期間中、それぞれの半券を提示すると割引があります！
高知県立文学館(令和8年1月17日～3月22日)一般600円→480円
香美市立美術館(令和8年1月24日～3月22日)一般400円→300円
※割引きは半券1枚につき1名様、1回限り有効です。
※他の割引きとの併用はできません。



▶ 加門七海氏記念講演会

自身の心霊体験をもとにした実話怪談でも人気を博す作家・エッセイストの加門七海氏が来高！“怖い”とは何か、怪談文学の魅力を作家の視点から語ります。

- 日 時 令和8年2月8日(日) 午後2時～4時
 - 場 所 高知県立文学館1階ホール
 - 定 員 100名
 - 参加費 要当日観覧券
 - 申 込 電話または当館受付にて事前申し込み
- ★サイン会も同時開催！文学館内ショップにてサイン会当日に著書をお買い上げ頂いた方先着50名様に整理券を配布します。

▶ アーティストトーク

香美市立美術館・都築房子館長によるトーク。文学館の会場に展示した「怖い絵」を中心にアート視点で“怖い”を語ります。

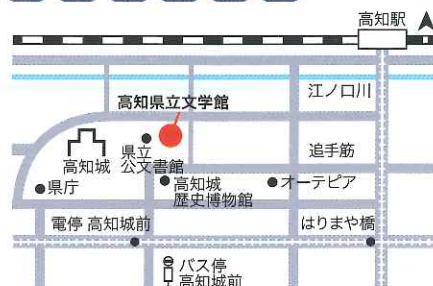
- 日 時 令和8年1月18日(日) 午後2時～(約1時間)
- 場 所 高知県立文学館2階ロビー
- 参加費 要当日観覧券
- 申 込 電話または当館受付にて事前申し込み

展示会の紹介をしています！詳しくは表紙・2ページ目をご覧ください。

利用案内

- 開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
- 休館日 年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休
※その他、メンテナンス等で臨時休館することがあります。
- 観覧料 企画展開催期間(常設展含む)…企画展ごとに異なります。
企画展を開催していない期間(常設展のみ)…一般400円
20名以上の団体は2割引。高校生以下無料。
身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、
戦傷病者手帳、被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者(1名)、
高知県・高知市長寿手帳をお持ちの方は無料です。
(窓口で手帳等のご提示をお願いする場合があります)
- 駐車場 なし。ただし近隣に有料駐車場があります。
- 附帯設備 ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、
茶室「慶雲庵」
- 貸出施設 企画展示室、ホール、茶室
- 運営 公益財団法人 高知県文化財団

交通のご案内



- JR高知駅から徒歩20分
(またはバス・路面電車を利用)
- バス・路面電車「高知城前」から徒歩5分
- 高知龍馬空港から空港連絡バス「北はりまや橋」
下車、徒歩20分



〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857

高知県立文学館 検索

